

第232号 通巻40巻第5号 令和2(2020)年12月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター 〒524-0212 守山市服部町2250番地

TEL&Fax 077 (585) 4397 Mail maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

令和2年も早、師走となりました。例年とは違った一年を過ごされたのではないでしょうか。 新型コロナウイルスが猛威を振るい始めた春先から今日まで、人々が集う様々なイベントの開催や四季を彩る祭りの斎行が制限、あるいは中止されてきました。この感染症禍の終息については、いくつかのストーリーが描かれていますが、今が我慢の為所ではないでしょうか。人類はその歴史の過程で幾度となく疫病に見舞われていますが、その時折、人々は英知を結集し、規律と連帯を強めることによって克服してきました。今こそ、先人たちの気概に学び、乗り越えていきたいものです。

それでは、今号も発掘調査の状況や開催事業をお伝えしていきます。

発掘調査だより

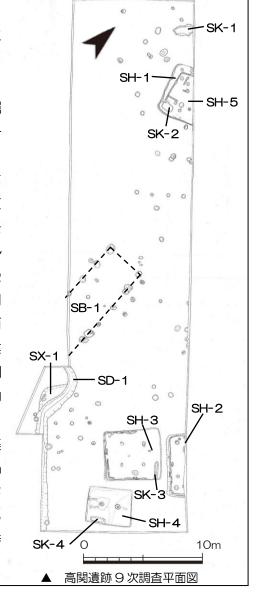
高関遺跡 第9次調査

前号でもお伝えした高関遺跡第9次調査は、共同住宅建設に 先立ち、8月17日から10月16日までの期間実施しました。 調査場所は伊勢町字鍵田地先で、面積は約400㎡でした。

調査の結果、右図のとおり、竪穴建物5棟(SH-1~5)、掘立柱建物1棟(SB-1)、土坑4基(SK-1~4)と溝1条(SD-1)、落ち込み(SX-1)と多数のピットを検出しました。

SH-1は調査区北半で約半分が調査区外へ続く形で検出され、平面は隅丸方形状で、一辺の大きさは南北に約4.5m、東西の規模は不明です。検出面から床面までの深さは約30cmを測り、2つの主柱穴を含むピットと周壁溝、そして貯蔵穴として使用されたと思われる土坑が検出されました。埋土からは受口状口縁甕や、くの字状口縁甕が出土しており、弥生時代後期頃の建物と考えられます。このSH-1を約10cm掘り下げた面でSH-5を検出しました。このSH-5はSH-1と同じ場所で建て替えが行われており、床面からは一部途切れているものの周壁溝が周り、間仕切り溝やピットが確認されました。出土遺物から弥牛時代中〜後期の遺構と考えられます。

調査区南東半ではSH-2~4と、SB-1、SD-1、SX-1と集中して遺構が検出されました。SH-3は長辺4.7m、短辺4.2mを測る北側にやや広がる方形状の竪穴建物で床面までの深さは約16cmとその他の建物より浅くなっています。埋土中から布留式の受口状口縁甕や高杯が出土していることから、古墳時代初頭の遺構と考えられます。4穴の主柱穴を含むピットと周



壁溝、間仕切り溝と土坑が検出されました。

SH-4は長辺3.6m、短辺3.0mを測るやや小ぶりの 方形竪穴建物で、埋土の中に多量の焼土塊と炭化材が 含まれていたことから焼失住居である可能性が推測されます。上面から布留式の甕や受口状口縁甕が出土しています。床面からは2穴の主柱穴、ピットと、長径1.1m、短径30cm、深さ約45cmの土坑を検出しました。



調査地全景写真





▲ 上:SH-1、5 下:SH-2~4

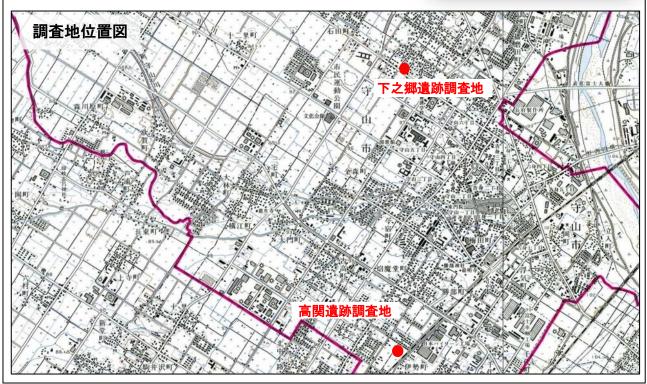
この土坑は、住居に備えられた貯蔵穴と考えられます。ここからは、 弥生時代後期後半の甕が出土しました。

調査区中央と南側壁際では掘立柱建物と溝が検出されています。と もに調査区外へ続き、それぞれに弥生土器片のみが出土しています。 溝は壁際をまっすぐ走っていることから、何らかの区画溝であったの かもしれません。近隣地において行われた調査では古墳時代前期の方 形周溝墓が検出されており、今回の調査地はそのような墓域を伴う集 落であった可能性があります。 (堀田)

下之郷遺跡 第 120 次調査

宅地造成に伴い、11月19日から120次を数える下之郷遺跡の発掘調査を実施しています。今回の調査地は遺跡の西辺にあたる下之郷町字白雨地先で、約600㎡の面積を調査する計画です。現在は、右写真のとおり鋭意調査中です。次号で調査の成果をお知らせします。 (畑本)





整理調査・正福寺遺跡第7次調査のその後

正福寺遺跡第7次調査の成果については、今年2月発行の乙貞第227号で報告しています。この調査の成果のひとつに、土坑SK-1から、作りかけの鍬と鍬に取り付けられる泥除けが出土したことを挙げることができます。鍬と泥除けは、アカガシという木を材料にした木製の農具です。出土後、およそ1年を経過した現在、洗浄作業を終え、大きさや形などを記録する実測を済ませ、水に漬けて保存していますが、今後、写真撮影を行う予定です。



▲ SK-1 からの出土状況

土坑から作りかけの鍬や泥除けが出土する事例は、下之郷遺跡(弥生時代中期末)、横江遺跡 (古墳時代前期)でも見られます。今回は弥生時代後期の時期と考えられ、弥生時代から古墳 時代前期まで、つまり、鉄製の農具が普及するまでの間、農耕に欠かせない木製農具づくりの 一端を垣間見ることができる貴重な遺物と言えます。



トピックス topics トピックス topics トピックス topics トピックス

令和2年度歷史入門講座

「**歴史の中の文化財~原始から戦国までそして未来の人々へつなぐ~**」 第5講を開催しました!

10月17日(土)、歴史入門講座第5講を開催しました。今回のテーマは、「近江の古代寺院と野洲郡」、そして講師は、滋賀大学名誉教授の小笠原好彦先生でした。

日本書紀に見られる瓦造りと、出土瓦の 文様の移り変わりについて、さながら大学 の講義のような理論だてた講演となりまし た。小笠原先生、ありがとうござました。



令和2年度秋季特別展

「発掘調査写真が語る守山の移り変わり」終了しました!

10月3日(土)より開催してきました令和2年度秋季特別展は11月29日(日)で終了しました。期間中は多くの皆様に来館いただき、ありがとうございました。

さて、今回は、当センター開館40周年記念事業として開催しました。発掘調査は各種開発に先立ち実施していて、発掘調査の度ごとに大きく景観が変ります。例年とは趣向を変えた今回は、昭和、平成の発掘調査写真に写りこんだ周辺の光景に焦点を当てた展示とし、かつての守山を懐古していただく、守山の移り変わりを再認識していただくことを目的に開催しました。

また、会期中の11月21日(土)には、講演会を開催しました。植田文雄さん(佛教大学歴史学部講師)を講師に迎え、『古代国家形成の成り立ちと「近江」』をテーマに講演していただきました。





▲ 展示見学風景

国史跡として保存整備内容が具体化し つつある伊勢遺跡、栄えたのは弥生時代 後期、換言すれば古代国家成立前夜と言 えます。

植田さんの講演によって、弥生社会と、 その時代、近江、つまり滋賀県が果たした 役割といったことを理解することができ ました。

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』や Face Book からもご覧いただけます!



←歴史のまち守山はコチラから http://moriyama-bunkazai.org

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶ https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks



【後記】この一年、乙貞の冒頭文や後記には、度々、新型コロナ感染症にまつわる話題を取り上げてきました。4月号の本欄でも天平年間に見舞われた疫病禍を取り上げました。この疫病は疫瘡、天然痘のことで、この流行で権勢を誇っていた藤原4兄弟は皆没し、後の大仏造立に繋がりました。

今夏、奈良・平城宮資料館では、時宜を得た「古代のいのり・疫病退散!」が開催されました。展示品はまさに疫病が蔓延した頃のもので、廃棄された完形の土器は感染予防のために捨てられたことや、奈良時代後半に食膳の器が小型化する傾向についても感染拡大を避けるために大きな器への盛り付けから個々の器にしたのではないかといった趣旨のコメントがありました。また、この疫病の終息を願った祭祀具も出土していますし、当時の政府も様々な救済策を講じていたこともわかっています。

今回の感染症禍終息後のライフスタイルを模索するときに今からおよそ千三百年前の「ウィズコロナ」ならぬ「ウィズ疫瘡」、古代の生活様式の変化を学ぶのも一考かと思いました。 (馬耳東風)